



## 万博・カジノ破綻 市対連 市民要求実現 維新政治転換

大阪市対策連絡会 議総会・講演会が8月25日開かれ、ZOOMも含め70人が参加しました。市対連統一も進みました。秋の取り組みの意思統一も進みました。

### 維新の会 国政は混迷

日本維新の会は22年の参議院選挙で比例区で議席増となったが、重点区であった京都、東京は議席を確保できず、選挙区はあまり変化しなかった。国政与党を目指し、集团的自衛権を認め、新自由主義的政策、原発推進など自民より多力派だが、代表と副代表の意見が食い違っているなど、国政レベルでの基本的な方針は未確定で、混迷している。

地方選挙では全国で議員数は徐々に増やしているが、大阪のようなスピード感は見られない。大阪以外での維新の主張は「身を切る改革」

### 万博・カジノ破綻 維新政治の破綻

大阪では「大阪都構想」「万博、カジノ」が地域政策。万博の会場建設費は当初計画1250億円が1850億円に増額など上振れ。夢洲はもともゴミと浸漬土で作った島で地盤沈下・汚染対策費

### 子ども政策を充実し、医療費窓口負担の完全無償化、子ども食堂補助、教育費完全無償化、教員不足解消、小・中学校の少人数学級実現などを求める陳情書

1. 子ども医療費助成制度の所得制限撤廃、窓口負担を完全無償化すること。
2. 子ども食堂に対する補助を拡大すること。
3. 教材、リコーダー、制服、体操服、ランドセル、指定カバン、遠足、修学旅行、クラブ活動、筆記用具、学習用ノートなどの自己負担をなくし完全無償化すること。
4. ひとり親世帯の支援、就学援助制度の捕捉率(利用率)を高めること。
5. 学校統廃合をやめ、小・中学校の全学年35人学級を直ちに実現すること。さらに30人学級とすること。正規教職員を増やし、「教員不足」を解消すること。

「第53回全国臨時教職員問題学習交流集会in静岡」が8月10日〜13日に行われました。今年の集会は4年ぶりの対面開催。大阪市教から2人が参加しました。



## 全臨教交流集会 静岡 教採2次対策

時教職員が現場の状況を報告。「県での採用がなくなったが20年以上非常勤として雇用されている」(高校・情報科) 「大学から1年後に雇止めするとの通知があったが、ストライキを行い再雇用を勝ち取った」(私立大学・非常勤)などの実状が語られました。

分科会は①正規採用制度・教員補充制度、②処遇改善、③仲間づくり、④教育実践、のテーマで討論を行いました。



大阪市教は7月29日「教採突破講座③2次場面指導対策」、8月6日講師組合員向け「2次対策講座」など、教員採用試験に向けた取り組みを行いました。

「万博・カジノの破綻」を広範な市民が認識したとき、大きな転換が起こる。地方政治が変わる要求実現運動

東南支部は8月27日に「おつかレインボー」を開催しました。昨年引き続き2度目のバーベキューになりました。

## おつかレインボー バーベキュー 東南

肉をどんどん食べているとあっという間に完食。食後は、学校でも楽しめるカードゲーム大会です。

夏休み期間、分会訪問に取り組みました。港支部は7月24・25日、事前に訪問日を知らせ、レンタカーで18分を回り11人に会うことができました。

中学校分会交流会は青年教職員の様々な思いを聞くこともでき、充実した交流会になりました。

参加者から、特別支援の話が聞け、パワハラ・モラハラについて共有できてよかった、困っている問題を気軽にしゃべれる場が必要、この交流会の回数を増やしてほしいとの声が寄せられました。

さて、気がつくとも夏休みも終わり、2学期には多くの行事が待っています。時にはこのように楽しく発散する場を設け、みんなで乗り越えていきたいものです。

南大阪支部は今年度支部に来られた方

ICT、パワハラ

ICT機器の活用では、電子黒板、プロジェクトの未設置や、無意味な「心の天気」の強要の報告がありました。

活を向上させ、阻んでいる原因を認識し政治変革の運動に繋げ、地域を支える主体を形成する)をすすめる。この両者を進めていくことが重要。

夏の分会訪問 つながり深めた

分会など4分会を訪問。2人の組合員さんに会うことができ、大変喜ばれました。

北大阪支部では分会合同ランチ会がひらかれました。暑い中で大変でしたが、少し余裕のある時期に職場に足を運び、組合員さんと直接お話しすることでつながりをより深めることができました。

## たんぽぽ だより 9月

ロシアのウクライナ侵略から1半。原水禁長崎大会に参加しました。

戦争なんて遠い国の出来事。そんなことを思っている現状ではないかと、私は最近強く思うようになり参加しました。

「再処理」するには、300m以深地層へ処分しなければなりません。しかも、人が近づけないほどの放射線、高コスト。

今、目の前にある事実は本当に「真実」なのか。学習を通して危機感を覚えると同時に、「だまされたいために学ぶ」ことが求められると強く感じます。